

「他力本願」の誤用を、どう考えればよいのか？

●質問 ● 社会の変容、時代の流れとともに、言葉の解釈にも変化が生じることがありますが、仏教語も例外ではないようです。特に浄土真宗では、「他力本願」という言葉の誤用が、近年たびたび取り沙汰されていますが、これはどのように考えればよいのでしょうか。

浄土真宗の教えやその用語には、誤解を招きかねないものがたくさんあります。たとえば「歎異抄」の「善人なほもつて往生をとぐ、いはんや悪人をや」(八三三頁)「親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念仏申したること、いまだ候はず」(八三四頁)等々の法語です。これらの言葉に初めて接した人はびっくりされることでしょう。親鸞聖人という方は、なんと非常識な人であったのかと驚かれる人もいることでしょう。「他力本願」という言葉

についても、他人に依存した消極的な考えを示す言葉であると受けとめる人も大勢いることでしょう。

私たちは教育やメディアが発達したお陰で、たくさんの方の知識や情報を手に入れることができるようになりました。コンピュータを駆使すれば、世界中の情報を瞬時に手に入れることができます。しかし、そうした知識や情報の大半は、処世術のための手段です。換言すれば、自分の欲望を満足させるための情報や知識といつてもよいでしょう。一方、

浄土真宗の教えやその内容をあらわす用語は、世の中を上手く生きていくための手段となるものではありません。

それではいったい、親鸞聖人は、何を求め何を明らかにされたのでしょうか。聖人は二十九歳のとき二十年間修行した比叡山を後にし、六角堂に百日間参籠されました。その後、法然上人のもとへさらに百日間通われていました。『恵信尼消息』によれば、「生死出づべき道」(八一頁)を求めてのことであったと記されています。「生死出づべき道」とは、私たちが避けて通ることのできない苦悩を解決する道のことをいいます。聖人は当初それを自力の道に求められたのです。自力とは、自力といふは、わが身をたのみ、わがころをたのみ、わが力をはげみ、わがさまさまの善根をたのみひとり (二六八頁) とあるように、わが身、わが

心をたのみとすることをいいます。しかし親鸞聖人にとって問題になったのは、そのたのみとすべき自分自身だったのです。聖人は『教行信証』「化身土巻」に、

しかるに常没の凡愚、定心修しがたし、息慮凝心のゆゑに。散心行じがたし、魔悪修善のゆゑに。ここをもつて立相住心なほ成じがたきがゆゑに、「たとひ千年の寿を尽すとも、法眼いまだかつて開けず」(定善義)といへり (二九三頁)

と記されています。愚かな凡夫には、「観経」に説かれた定善の行も、散善の行も修めることができない。だから、たとえ千年という寿命を費やしても、真実を見る智慧の眼を開くことはできない、ということです。この愚かな凡夫とは、正しく親鸞聖人ご自身の姿だったのではないのでしょうか。聖人は自らをあてにした自力修行では、二十年という歲月

を費やしても、自らの抱えている苦悩の解決、さとりを開くことはできなかつたのです。聖人の求道が真剣なものであればあるだけ、自らが歩んできた道では目的は達成されないと分つたときの絶望感、筆舌に尽しがたいものがあつたと思われまふ。そうした絶望の淵にあつたとき、今度は逆に目指すべきさとりの世界からはたらきのあることに気づかれたのです。それまではただひたすら、わが身をたのみとして苦悩の解決を図っていたのが、目指すべきさとりの世界からはたらきによつて、たのみとしていた自らの姿がそのままに照らし出され、ありのままの自分がそのままに、そのはたらきによつて救われていくことに気づかれたのです。それが法然上人の導きによる他力本願の法との出会いだったのです。バブル景気が崩壊して後、しばらく心の時代ということ

が新聞紙上等で取り上げられました。欲望を重視した考えからの転換を訴えたものだったのでしょうか。しかしながら、自分自身に目を向けることはなかなか難しいようです。私たちの目は、たえず外にばかり向いています。しかも外に向いたその目は、自分の今もっている価値観を信じて疑わない目です。その目を通して見るにより、自ら苦を生み、他の人も傷つけていることに気がきません。親鸞聖人は逆にそうした自分自身を問い続けたのです。その結果出遇つたのが、自分自身の姿がそのままに照らし、そのままに救い取って下さる他力本願の法であつたのです。

そのような性格の法を、処世術のための手段として受け止め、その範疇で理解しようとするところに、混乱を生じる原因があると思われまふ。(龍谷大学助教授 普賢保之)